The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	五島忠久名誉教授に聞く ： 大阪大学の思い出
Author(s)	菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2010, 59(4), p. 125-135
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27163
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【資料】

五島忠久[†]名誉教授に聞く

－大阪大学の思い出－ *

菅　　真　城[‡]・阿　部　武　司[‡‡]

2008年3月10日
於　五島名誉教授宅（大阪府柏原市）

浪速高等学校生活

菅　それでは，今日は大阪大学名誉教授でいらっしゃいます五島忠久先生に，旧制浪速高等学校および大阪大学教養部のお話を中心におうかがいできればと思います。

まず，先生は昭和3年に浪高の高等科の第2回生として入学されているわけですが，そもそも新設の浪高に進学なさった理由というのは，どういったものなのでしょうか。

五島　私の高等学校入学のときの選択としては，三高へ行くだけの能力はないし，土地柄で言いますと松江や高知へ行きたかったのですが，私が受験する年には，文科で数学がない学校がいくつかあって，ちょうど浪高の文科は数学がなかった。それで私は受けたんです。それだけの理由なんですね。また，自宅から通えるということも理由でした。そのとき，私は浜寺に住んでいましたから。

そして無事に浪高の文科甲類に入学しました。これが浪高に入学した理由です。

菅　文甲ということは，最初から英語にご興味があったのですか。先生は英語がご専門でいらっしゃるのですが。

五島　私は中学時代から外国語に興味を持っていたんです。それで勝手にラテン語の本を買ってめくってみたり，フランス語やドイツ語の本をめくってみたりしていたんですね。そういうところから，職業は英語の先生ぐらいになりたいと。それで高等学校の文科甲類へ入ったわけです。

菅　入学なさってからのことで，高校生活では楽しい思い出や苦しい思いでなど，いろいろな印象深いこともあろうかと思いますが，浪高について，先生が特に記憶に残っていることがあれば，お話しいただければと思います。

五島　私の高校3年間は，バスケットボールばかりやっていました。昔は籠球部と言っていたのですが，そこへ入部して3年間，部生活一筋でしたね。ですから，近くにいながら宝塚にも行かず，夏は合宿，冬は合宿はしませんでしたが，毎日，一緒になって練習をして，3年間バスケットボール一本，ほかのことは何もしませんでした。

菅　よく浪高の方々は宝塚が大好きだというお話をうかがうのですが，先生はわりと硬派な学生で。

五島　私は硬派も軟派もないですね。運動部は，また別です。昔から，よく柔道部や剣道部は硬派になっていましたけれども，私たちはそ

---

* 本稿は，大阪大学文書館設置準備室が実施している名誉教授インタビューの記録である。口述筆記であるため，浪速高等学校を浪高，梅花高等女学校を梅花女学校など，当時の通称をそのまま用いているところがある。ご注意願いたい。

† 大阪大学名誉教授
‡ 大阪大学文書館設置準備室講師
‡‡ 大阪大学大学院経済学研究科教授

ういうこととは関係なしに，バスケットボール一本で一生懸命にやっていました。

菅　試合相手は，どういった学校ですか。

五島　関西の会がありますし，全国大会がありますね。私のときには優勝できませんでしたが，浪高の教師として帰ってきてからは，関西でも優勝しますし，最後には全国大会で優勝もいたします。

浪高の学生時代の印象というのは，そんなところですね。甲南との定期戦もしょっちゅうやりました。あとは読書もそこそこやりましたけれども，とにかくバスケットボール一本の３年間でした。

浪高に赴任

菅　よくわかりました。浪高を卒業後，先生は東京帝大に進学なさって，卒業後は千葉県と大阪府で中学校の教諭を務められ，そのあとに浪高の教授として母校にお戻りになられます。今度は教員として浪高に赴任された事柄についてお話しいただけますか。

五島　結局，千葉県には４年間いましたね。安房中学が１年間，その前に千葉県へ就職したいきさつが少しあるのですが。

この当時は非常に就職難で，大学を出ても就職できないので，仕方なく幼稚園の先生になるような大学卒業者もおりました。私も１年間は大学院に入りましたが，その理由は就職するところがない。ですから，われわれはみんな，大学院に入院すると言っていました。そういう人が大部分だったんです。

それで私は，この千葉県の採用試験に応ずるために，どれだけの人に頼ったか。いまから私が申しあげるのは，みんな私が直接行って就職をお願いした方々です。千葉中学の校長，それから千葉県庁の学務課の課長および就職をつかさどる役人がいましたので，そういうところにも紹介状をもらって行きました。また，千葉県議会の議長のところへも，紹介状をもらって「よろしくお願いします」と行きましたし，私の卒業した東大言語学科の主任教授は，わざわざ千葉県庁へ行きまして，学務課長に会って頼んでくれました。

とにかく，その当時の話を聞きますと，総理大臣の紹介状を持ってくる人もいるし，文部大臣の紹介状を持ってくる人もいるほど，ひどい就職難だったんです。私が千葉県の採用試験を受けたときには，英語の先生の採用人数は２人ですが，それに対しての志願者は七十何名だったそうです。

しかし，その採用試験というのは実にはっきりしないもので，数名の先生や役人がいるところへ行くと，君は大学でどんな卒業論文を書いたのか，健康はどうかと，実にくだらないようなことを聞かれる。そして結局，いろんな人から紹介状が来た人を，うまく案配して，文句が出ないような人間を採るんですね。それで私は採ってもらったんだと思います。

そして安房中学に１年，成東中学校に３年。そのころ，千葉県でご指導を受けた佐藤一男（後，大阪府立大手前高校校長。金蘭短大学長・理事長）という東大出身の英語の先生が大阪の中学にいたのですが，その人が私のことを大阪府庁の学務課に紹介してくれて，私を大阪へ引っ張ってくれた。それが大阪へ来た理由です。

それから，浪高に赴任したいきさつです。私は大阪に移ってから，大阪府立高津中学校に６年間勤めていたのですが，そのころは，私のバスケットボールの部長の猪谷文臣先生（京大卒，西洋史担当教授）にときどき連絡をしていました。そしてあるとき，私の浪高での英語の恩師が急に亡くなられたのでお葬式に行くと，そこにバスケットボールでお世話になった猪谷先生が来ておられたんです。

それで，いろいろ話しているなかで，亡くなられたのは私が英語を習った先生なので，あの

先生が亡くなられたけれども，なんなら僕を浪高に引っ張ってもらえませんかと，直接，そんなことを言ったんです。すると，猪谷先生は「そうやな。君を引っ張れば，ちょうどええなあ」と言って，浪高の英語の先生なんかに連絡を取って下さって，私に浪高に来てもらおうと，そういうことで，亡くなった英語の先生の代わりに，私が英語の先生として引っ張られたんです。

菅　先生が浪高に帰られたのは昭和21年で，戦争が終わってからになりますが，学校の雰囲気など，先生が在学中と違うところはありましたか。

五島　それはあまり感じませんでした。浪高に教師として行ったときも，すぐにバスケット部の部長にされまして，教師でありながら，余分な生活は全部バスケット部の学生と一緒にやっていた。とにかく私は，高校へ入ってから大学を出て，浪高へ赴任しても，バスケットボールから離れることはできなかったんですね。

そして，私のころには大きな問題はありませんでした。

菅　それから数年すると新制大学ができて，旧制高校が廃止されることになると思いますが。

五島　ですから，私が浪高で教師をしていたのは3年足らずですね。すぐ新制になりましたので。

それから，ここで一つ。私が浪高に教師として入ったころから，いわゆる学生と教師との密接なつながりと言いますか，そういうものを重視するようになりました。浪速大学とのことがありますが，ちょっとその前に，阪大に移ってからも，いわゆるクラスの担任制度というのができたんですね。まるで中学校の担任と同じようなかたち。

それは，たしか政府からお金が出ていたと思います。思想善導費とか何か。阪大や浪高に新入生が入ってくると，クラス担任というものが決まり，1年に2回ぐらいコンパをするのですが，そのお金も学校から出たんです。そういうことが，当時のはっきりした印象として残っています。

浪高の統合先

菅　府立大学のお話を少しだけおうかがいしたいのですが，浪高は大阪府立ですので，そのまま府立大学（浪速大学）になるのか，それとも阪大と一緒になるのかと，いろいろ意見が分かれていたと思います。そのあたりのいきさつで，ご存じのことがあれば教えていただきたいのですが。

五島　府立大学に行くか，新制大阪大学に行くかという問題ですが，われわれはそんなに問題にしませんでした。だいたい大阪大学に行くような傾向で，すうっと行ってしまったような気がいたします。

ただ，最後の浪高の校長問題は，ちょっとごたごたしました。これは皆さんもいろいろな浪高の歴史の本でご承知かと思いますけれども，森河（敏夫）という大阪府の学務課長が浪高の最後の校長としてやってきまして，それを学生が嫌う理由もないだろうと思うのですが，役人が校長で来て，浪高の最期を看取ってくれるのは気に食わんとか言い出しまして，ごたごたしたことがございます。

あいだに立った人は，そうとう苦労したようですね。大阪府の役人に対して，浪高を国立大学の一部に吸収してもらうということを主張する。それは，その当時の大学関係の力問題で決まったのではないかと思います。ちょっと問題になったようですが，学生あるいは教師になりたての私たちには，そんなに問題として感じなかったですね。

菅　教員は阪大のほうへ，本や実験器具などは府立大学にいってしまったということで，阪大になってから，そういう本などがなくて困ったことはありませんでしたか。

五島　僕は，そう感じなかったですね。そんな本など利用する必要もなかったのですね。

教務委員長頑張る

菅　先生は昭和24年に新制大学へ移られて，大阪大学の助教授となられて，それからご退官まで教養部で活躍されます。このへんのお話は，先生にご用意いただいた資料に沿ったかたちでお話しいただいたほうがいいかなとも思うのですが。

五島　はい。私が新制大阪大学に移ってからの問題で，いくつか申しあげたいことの一つは，ここにありますように教務委員長というのをやらされたことです。それは浪高時代から，さらには新制大阪大学に移ってからの生活でも，大きな比重として私の生活を支配した。そのことを少し申しあげておきます。

浪高時代には，それぞれの教師は自分の専門学科を教える以外に，庶務課，教務課，生徒課，図書課などのどれかに属し，いわゆる授業以外で学校経営の一翼を担うということでした。これは，たぶん，どこでもやっていたと思います。

それで私は，教師になってすぐに教務課の一員にされました。ですから，英語を教えると同時に，教務課の部屋に属し，そこで学校のいろいろな教務の仕事の義務を負うわけですね。それが私が教務課の一員として，阪大になってからもずっと尾を引くきっかけだったんです。

この教務課の主な仕事は，皆さまもご存じのとおりだと思いますが，授業の時間割をつくることと，試験のときの時間割をつくること。試験の時間割は，それほど難しいものではありませんが，授業の時間割というのがひどいんですね。

これはお持ち帰りいただきますが，昭和40年度の大阪大学教養部の時間表です。もう一つ，ほかの年度のものもお持ち帰りいただきますね。こういった時間割をつくるんです。これは全学部ですから，この最初に出ているので数がわかる。時間がいくつあるのか。これを見ますと，月曜日には66のクラスがある。66のクラスがあるということは，1学年10クラスの高等学校が2つ。それを一緒くたにしたものに相当します。

教務課では，先生が4人ぐらいと事務官が2人ぐらい。それだけで，与えられた期間というのは限られます。そこで，こういうのをつくるんですね。並大抵のことではなかったですね。いまであればコンピュータで全部できるのですが，このころはコンピュータを使っていても，こういうことまで手を出すことができなかった。ですから，将棋の駒を使って動かしたり，ものすごい手間がかかりました。

これが教務課の大きな仕事です。ただ私は，しだいに教務課の課員としてベテランのようになりまして，最後には教務委員長までやらされました。これは何名かの各学科の代表の先生を統率しまして，教務課の時間割作成以外にも，いろいろな問題をさばいていかなければいけない。

これは私が調べてみたのですが，平成14年の大阪大学の職員録を見ますと，この当時の全学的ないろいろな委員会は39あるのに，昭和38年ごろの大阪大学の職員録で，いろいろな委員会を見ると，16しかないんです。ですから，教養部の教務委員会が教養部内のことは何でもかんでも全部引き受けなくてはいけない。

教養部の部長なんかは，すぐ私を呼びまして，「五島くん，このあいだ二，三の先生と話し合ったんだが，こういう問題が起こってきたから，教授会に出す前に教務委員会で討議してくれ」と。そういうふうに，何でもかんでも教務委員会に持ってくるんです。他に色々な委員会がなかったので，私は頭に来るぐらいに，いろいろなことを全部引き受けてやらされた。それが一番強く印象に残っております。

私は教務委員長を辞めてから，いまはどう

なっているのかと聞きましたら，「コンピュータの会社に全部任せています」と。もう，それでいいんですね。ですから，私はずいぶん教務委員長として苦労させられました。

菅　先生は二十数年間，ずっと教務委員ですか。

五島　いや，そんなことはない。丸4年で辞めて，しばらくは楽ですけれども，また教務委員にさせられて。委員長は2年ぐらいやりましたけどね。そういう経験が，浪高から阪大にかけての二十数年の教師生活のあいだで，はっきりと印象付けられている事柄です。

その次はどうしましょう。

4 大学一般教育協議会

菅　先生の資料に沿って，4大学一般教育協議会のお話をいただければと思います。

五島　それは結局，先生方もよくご存じだと思いますが，教養部というのが一番つらかった。何でもかんでも，みんな教養部が悪いからだとか言われたんですね。そういう時代のことを私は申したいのですが。

これは4大学の教養部の部長が中心となり，もっと文部省へ訴えようということで，名古屋，京都，大阪，九州の旧制国立総合大学が集まりまして，毎年，教養部のいろいろな問題を話し合うことにしました。

当時，われわれが訴えたことは，教養部は教官が少ない，予算が少ない。特に理科系の教師から出た文句では，助手がなかなか取れないということで理科系の人は困っていたんです。それから，教養部の教官の持ち時間が多すぎる。もう少し少なくすむように考えてもらいたい。

また，これはよその大学でも同じだとは思いますが，工学部は非常に学生数が多いんです。しかも当時，阪大では工学部でも前期は英語がほかの学部と同じようにありますが，後期は英語の時間がなくなって，そこへ専門科目を入れたりする。ですから，先ほどの時間表でご覧いただくとわかりますが，時間割の編成の仕方が非常に難しくなるわけです。そういう問題も含まれています。

それからもう一つ，これは各学部から文句が出たことですが，教養部の先生は自分は時間を増やさないで，他の学校からの先生を非常勤で呼んでいるではないかと。そのために非常勤の先生が非常に多い。非常勤の先生に来てもらうぐらいなら，自分がよそへ非常勤に行くのをやめて，自分の学校の授業を持ったらどうかと。この問題に対しては，われわれはあまり文句を言わないで，「そんなことをしたら阪大の教養部へ専任で来てくれる先生が来なくなりますよ」と言ってチェックしていたわけですが，とにかく非常勤の先生が多いということが問題になりました。

例を申しますと，これは昭和43年度の新制大阪大学の英語の専任教官と非常勤教官の数を分けた例です。昭和43年度の阪大の英語の専任教官は17人，それに対して非常勤の先生は35人。こういうことになるんですね。

ですから，よその学部の先生方から，それだけ多くの非常勤を雇うぐらいなら，専任の先生が，よその学校に非常勤で行くのはやめて，自分の学校のためにやるべきだという文句が出るのも無理はないかと思います。

菅　専門の学部の先生方はそうおっしゃいますけれども，教養部の専任の先生方のほうが，授業の持ちコマ数というのは，学部の先生方よりもはるかに多かったのではないでしょうか。

五島　そうですね。多いです。それが，どうしても経費の問題で圧迫されているんですね。そういうことから，この一般教育協議会というのは，4大学が集まりまして，協力して文部省に働きかける。もっと教養部に金を回してくれと言ったわけです。

菅　たしか昭和38年に，教養部が法律に基づいて法制化されたと思うのですが，それはあまり影響はなかったのでしょうか。

五島　結局，最後に新しい学部のない大学院ができましたね。言語文化研究科。あれで外国語は結実したわけです。ただし，体育がちょっとはみ出したようになったのですが。いま，あれはうまくいっているんでしょうね。

だから，こういう教養部の問題がだんだん大きくなりまして，言語文化部ができる前は，各学部に分属しろ，独立した一つの学部をつくれとか，いろんなことが出てきたわけです。しかし，あの各学部に分属させるという問題は，常識的に考えてもわかると思いますが，英語の先生が20人近くいて，ドイツ語の先生も20人近くいる。そんなものを引き受けるところは，どこにもないんです。文学部の英文科を考えてみましても，英文科の先生で専任は，主任教授と助教授，講師の3人ぐらい。そこへ20人近い人間を引き受けたら，むちゃくちゃになる。

もっとも東京の私立大学などでは，必ずしも文科に属させないで，工学部の専任の英語の教授なんていう組織もあります。そういうほうに持っていけばいいかもしれませんけれども。

とにかく，この分属というのでは，どうやっても最終的な解決はできないと思うんです。いまの阪大のように言語文化研究科として学部のない，研究科だけの一つの組織をつくる。そこへ今度は大阪外国語大学と統合しましたから，これはちょうどうまくいったんですね。そういうふうに私は思います。

学閥などに用はない

菅　これから先は，ずっと先生のメモに沿って進めさせていただこうかと思うのですが。

では次に，先生にご用意いただいた，「学閥などに用はない」というテーマで，学閥のお話をお願いいたします。

五島　学閥という言葉は，辞書によると二つの意味があります。一つは学問での党派，もう一つは出身学校による党派。辞書には，そんなふうに書いてあります。

私がここで申しあげたいのは，出身学校による党派，その学閥のことなんです。私はそんなにたくさんの大学に関係したことはありませんが，ある大学などでは，ものすごく出身学校にこだわっているところもあります。誰か先生が辞めて一つ空席ができると，そこにいるほかの先生たちも，みんなある大学の卒業生ばかりなので，すぐに母校へ連絡して適当な人をよこしてもらう。いまでも，そういう大学があります。

しかし，当時の阪大にいた英語の先生の出身校を見ると，東大，京大，そろそろ阪大文学部の英文科が育ってきましたので，その卒業生もいましたし，検定で高等教員の免許を取った人，京城大学から引き上げてきた先生など，いろんな人がいたんですね。ですから私も，閥意識というようなものは感じなかった。

そして，あるとき，阪大の教養部英語科で新しい先生が必要だ，誰か選ばなくてはいけないとなったときに，若い阪大系の先生だったと思いますが，何人かが，いま，うちの大学には東京高等師範学校（旧：東京教育大学，現：筑波大学）系統の先生が1人もいないから，一つ呼んでこようではないかと言ったんです。非常にあっさりした，すっきりした考え方です。

私たちは誰も文句なしに来ていただこうということになりまして，われわれのなかで適当な方の論文を集めて，全員が読んで調べて，適当な方に来ていただいたと，そういうことがあるんです。それを私は特に強調したいんですね。阪大はそういう点がフリーで，東大，京大の悪口を言うわけではありませんけれども，そういうところの卒業生を採る執念というほどの強いものは，当時の阪大にはなかったような気がします。もちろん，私は教養部しか知らないのですが。

ただし，これもあまり業績のほうにこだわりますと，人間的に変な人間が入ってくる。それは私たちも痛感したことがあります。

往復６時間通勤から下宿住まいまで

五島　それから次の問題は，「往復６時間通勤から下宿住まいまで」という変な題を付けましたけれども，終戦直後は非常に交通が不便で時間がかかり，私なんかは，この柏原（大阪府）から石橋へ行くのに，片道３時間かかっていたんです。それは，まだ交通機関が復興していなくて，すぐに停電したり，電車が故障したりということがあったんですね。

それで私は，帰りにしょっちゅう大阪梅田の地下で食事をしていて，朝は通勤に３時間かかりますから，夜中ごろから起きて行くのです。そういうことがあったのですが，その後，私は時間割のやりくりをある程度してもらいまして，阪大の研究室へ泊まり込んでいたことがあります。それは冷蔵庫を買って，組み立て式の寝台を置いておけばいい。冷蔵庫だけで食事をつくるのは面倒くさいのですが。

しかし，そのうちに大学紛争になりまして，研究室には泊まれなくなった。私の部屋は大学紛争で被害を受けなかったのですが，それでも研究室に泊まるということは，あまり好ましくない状態になりましたので，石橋に下宿屋を探して，１週間のうちの２日か３日泊まる。そういうこともやりました。

それから大学紛争のときは，あちこちで会議の場所を探さなくてはいけなくなりました。このことが，私はいまでも忘れられないんです。ほかの学部のことは知りませんが，教養部の教授会あるいは教官会議というものを，どこで開くか。学校では開けないんです。一番よく開いたのは，豊中の市民会館というのでしょうか。いまは何というのか知りませんが，そこで教養部の会議を一番よく開きました。それ以外では，池田の何かの会議室を使ったり，産研（産業科学研究所）の講堂を使ったり，塩見記念室なんかを使ったこともあります。

しかし，私が一番印象に残っているのは，もう大学紛争が終わりに近づいたころだと思いますが，どこも行くところがなくて，変な温泉宿の広間でやったことがあるんです。このときは本当に，流れ流れてどこまでいくかの感じで，なんとも言えないうらさびしい気持ちをしたことを覚えています。部長とか２，３の人は，次の会議の準備をしなければいけないので，すぐには帰れない。その温泉宿みたいなところへ泊まったのだろうと思いますが，私は石橋の下宿へ帰って寝たことを覚えています。それは大学紛争のおそえものに過ぎないことかもしれませんが，当時の私としては，一番印象に残ったことですね。

菅　大学紛争は，教養部の先生方が一番ご苦労なさったのではないかなと。大人数教育とかが，やり玉に挙げられたとは思うんですが，そのへんの学生たちとのやりとりとかで何か。

五島　先生をつるし上げたのは，ほかの学部は知りませんが教養部ですね。ああいうところには出ないほうがいいんです。私は出なかった（笑）。正直に出ると，つるし上げられて，決して勝てないんですね。

新制と旧制の学生のこと

五島　その次は，新制と旧制の学生のこと。私は旧制のことは，あまりよく知らないんです。新制で特に印象に残っているのは，うちに写真もありますが，毎年，入ってきた学生を，そのときの教養部の先生に案配してクラス担任というのをつくった。これは一種のクラス制度だと思います。まるで中学校などの先生と同じように，新入生のどこかの１クラスに割り当てられて，そこで集まってコンパをやる。そのコンパのお金は，思想善導費などと言っていましたが，学校から出ているんです。そこではお酒も飲みますし，一緒に歌を歌って騒ぐ。たいしたことではありませんが，しないよりはましだと思います。そういう印象が残っていますね。

ですから，いま旧制大学なり旧制高校のクラス会なんかをやっているのは，そういうことをした結果だと思います。悪いことではないですね。

教養部と学部との関係

五島　教養部と他学部の先生との関係ですか。これは先ほども申しましたように，われわれ教養部は文部省から金をくれないではないか，大学からも金を回してくれないではないか，それでまともな教育ができるかという不平を絶えず持っておりました。それに対して，各学部の先生は，教養部の先生はもっと働くべきだ，非常勤を頼むぐらいなら自分で非常勤の代わりをやれと。そのようなことを中心として，やはり意思が疎通しない面があったことは確かだと思います。これは仕方のないことだと思いますね。

菅　そういったなかで，先生は文学部でも授業をされていたと思うのですが。

五島　文学部のほうは，ずっと持っていました。教養部の先生が，文学部大学院の研究科の授業を担当するということでは，例えば英語科でしたら，私を入れて2人か3人の先生が担当者になっていた。そういうことは，よくあります。しかし，しまいには私だけになったこともあります。この点は国文学・心理学・歴史学などの場合も同じで，教養部の教授が文学部や大学院の授業を担当していました。

これは給与の問題と関係してくるのではないでしょうか。私なんかも，「大学一覧表」のある年とかを見ると，教養部は普通に教授何々と出ていますが，やはり私は大学院のところに「英語学担当教授」と出る。あれは何かおもしろい取り扱いの法則があるんですね。それで給料が多いかというと，そんなことはないのではないですか。とにかく，お役所というところは難しいところですね。

菅　たぶん昔は，大学院担当分でいくらかのお金が付いていたと思うのですが，最近は付きませんし。

五島　いまは大学院担当というのが出ていますね。あれは，やはり給料が違うんでしょう。

阿部　いまの建前では，大阪大学の先生たちは大体全員，大学院所属ということになっていますので，区別は前ほどうるさくないようです。

外国語教育をめぐる諸問題

菅　先生に「外国語教育をめぐる諸問題」という話題をご用意いただいていますので，外国語教育についてのお話をうかがいたいと思います。そのうえで，昨年，阪大は大阪外国語大学と統合しましたので，そういったことをどのように評価したらいいのかということも含めて，お話をおうかがいできれば幸いです。

五島　私は十年間ぐらい，大阪外国語大学のスワヒリ語を担当したんですが，これは学生の必須単位ではないんです。そんなものまで必須単位にしていたら学生も大変でしょうから，大阪外国語大学の研究語学の一つとして，あそこに資料を出しておきましたけれども，研究語学。ですから，聞いても聞かなくてもいい。いわゆる，それを取らなければ進学できないということはないんですね。そういう一つとしてスワヒリ語を担当してくれということで，10年間ほど担当いたしました。

そういうところに出てくる学生は，かえって熱心ですね。私はたいして能力があったわけではないのですが，ちょうどスワヒリ語のテープも出てきていましたから，スワヒリ語のテープを使って学生に聞かせる。そのテープを貸してくれと言って持って帰り，それをダビングした学生も何名かいたぐらいです。そういう意味で，外国語大学でのスワヒリ語の教育というのは，案外，楽しいものだったような気がいたします。

外国語教育に関する問題。教養部の英語科が

考えた外国語教育に関する論文がありますので，それを差しあげておきます。向こうに置いてあります。

結局，外国語教育の問題は，いろんな面から考えられるわけです。例えば，あの人は英語がよくできるということでも，簡単には言えない。発音がよくできる人もいますし，英語の意味を取るのが上手な人もいますし，いろんな面から英語ができるということを言わなければいけない。そういう問題が，まずあるんです。詳しいことはやめますが。

それで，よく問題にされるのが，大学で教える英語は教養英語なのか，実用英語なのか。こういうことで，よく議論をしますし，そのほかでも，いろんな問題があります。教養で教える英語が1時間や2時間というのは時間が長すぎると。30分ぐらいを単位にして，語学は集中的にやらなければいけないとか，クラスの人数を減らせという問題も出てきます。こうなりますと，また時間割編成の問題にかかわってくるんですね。

いろいろな問題が出てまいりますので，そう簡単に「承知しました」というわけにはいきません。この問題については，主として，今度統合された外国語学部の大きな仕事として遂行してもらいたいと思っております。

阪大と大阪外大の統合

五島　大阪外大との統合は，いわゆる至上命令によるものと言えるでしょうが，私は，阪大にとっては大変良いことだったと思います。阪大は昔の創設時から理科系の学校として知られ，医・工・薬系の大学となってからも，そのすぐれた業績で日本の学界の一翼を担っていましたが，昭和23年に法文学部が設置されて，やっと文・理の両面を備えた大学として総合性を発揮することが出来るようになりました。

しかし今後，高度で多彩な国際的人材を養成するには，すぐれた専門研究と研究を担う総合大学と，多彩な外国語教育を担う単科大学の統合によってはじめて可能になることが分かってきました。

そうした意味で，今回の統合は，阪大のためにも，大阪外大のためにも，将来のすばらしい進展を期待させるものであると考えております。

最後に，スワヒリ語についてあまりご存じない方のために，守野庸雄氏の『スワヒリ語会話練習帳』の中の言葉を引用させていただきます。

> スワヒリ語は，今日その国語化を宣言しているタンザニア，ケニアを中心にソマリア，ウガンダ，ザイール，ザンビア，マラウィ，及びモザンビーク等の隣接諸国の一部においても各部族を超えた共通語として話され，話し手の数，四千万を有する東アフリカでは最も有力な言語の一つとなっています。

阪急宝塚沿線で育ったもの
—大阪大学の歴史のひとこま—

菅　こちらで用意した質問にはお答え頂いたのですが，あとは先生のほうで，「阪急宝塚沿線で育ったもの—大阪大学の歴史のひとこま—」という話題をご用意頂いていますので，これについてよろしくお願いします。

五島　まあ，半分は一種の逸話みたいなことになります。それは阪急沿線によって，われわれの印象に残るいろいろなことがあったことです。

その三つを申しますと，第一は宝塚歌劇。これは先生方もご覧になったかどうか知りませんが，秦郁彦という方が著した『旧制高校物語』という本に出ております。それは浪高時代のことですが，地方から初めて大阪へやってきて，浪高へ入って，宝塚の舞台を見に行くと，感激のあまり舞台に下駄履きのまま上がって，寮歌

を歌いながら踊った猛者がいる。そういうことが書かれております。

それから，これは私たちが学生時代にやったことですが，記念祭などいろいろな催し物があるときには，宝塚へ行って古い衣装を貸してもらう。いまどき，そんなことはできないと思いますが。また，宝塚の少女と親しくなって，ラブロマンスにまで発展した人もいます。卒業生では，もっと関係が深い人もいまして，宝塚音楽学校の校長になった人もいます。

また，娘さんが宝塚の音楽学校へ入った人。これは私のことを申しあげて恐縮ですが，私の弟は浪高の第4回卒業生で，その弟の孫娘は宝塚音楽学校の入学試験を受けて，二十数倍の難関を突破して，第77期生として入学しました。もちろんトップスターにはなれません。トップスターになれるのは男役ですから，小柄な子はいけないし，条件がある。また，その相手となるスターにもなれず，結局，私の弟の孫娘は7年間宝塚で舞台に立ち，さっと結婚して，いまは平凡な家庭の主婦です。こういう人がたくさんいます。

それから第二番目は，宝塚沿線関係の問題としてはくだらないことかもしれませんが，宝塚の夢の世界とは別に，宝塚を中心にして，われわれの印象に残る女学校が二つあるんですね。豊中の梅花女学校と，石橋の宣真女学校。その梅花女学校の在学生，あるいは卒業生と浪高の卒業生と親しくなって結婚した者がいます。私の教え子でも，そういうのがいますね。

また，当時は浪高の先生方もみんな若かったものですから，宝塚のほうに住んで，豊中の梅花女学校の先生として教えに行ったりしていて，生徒と仲良くなって結婚し，きちんと立派に暮らしていらっしゃる先生方もいました。そういうことを私は付け加えたかったんです。

もう一つは，宝塚のような華やかな世界とは裏腹ですが，「ソーライ」という言葉をお聞きになったことがありますか。ソーライというのは，ソースとライス。阪急百貨店の最上階の食堂へ行くと，浪高の学生はライスだけを取る。当時，ライスは5銭だったんですね。ライスをもらって，そこへソースをかけて，そこにある福神漬けを取って食事をする。5銭で昼飯をすませる。それをソーライと言っていました。

私もやったことがありますが，そういう思い出を，われわれはいつまでも忘れないでいるということを，ちょっと付け加えておきたいと思います。

阪大生へのメッセージ

菅　これで用意した質問にはお答えいただいたので，最後に現在の阪大生に向けて，メッセージをいただければと思います。

五島　では，こういうことを一つ。「われらが学園の創始者の意欲と努力を範とせられたし」。もちろん，この創始者というのは緒方洪庵先生のことです。

これについては，司馬遼太郎さんの『花神』という小説があります。これは小説と言っても空想的なものではなく，日本の軍隊の制度をつくった大村益次郎の生涯を描いた作品です。その文庫本3冊からなっている第1巻の最初には，こんな言葉が出てきます。

> 「適塾」
>
> 　という，むかし大阪の北船場にあった蘭医学の私塾が，因縁からいえば国立大阪大学の前身ということになっている。宗教にとって教祖が必要であるように，また私学にとっても優れた校祖があるほうが望ましいという説があるが，その点で大阪大学は，政府がつくった大学ながら，私学だけがもつ校祖を持っているという，いわば奇妙な因縁を背負っている。

この校祖とは，言うまでもなく緒方洪庵先生のことですね。ですから，われわれは，この校祖の意欲と努力を手本にして，地域に生き世界

に伸びんとするわが阪大のために，頑張りたいと思います。どうぞ阪大の学生諸君も，この校祖の意欲と努力を忘れないようにして，頑張ってもらいたいと思います。

菅　ありがとうございました。

五島忠久名誉教授略歴

1910 年 9 月　生まれる
1928 年 3 月　大阪府立天王寺中学校卒業
1931 年 3 月　大阪府立浪速高等学校高等科文科甲類卒業
1935 年 3 月　東京帝国大学文学部言語学科卒業
1936 年 4 月　東京帝国大学大学院退学
1936 年 4 月　千葉県立安房中学校教師嘱託（1937 年 4 月まで）
1937 年 4 月　千葉県立成東中学校教諭（1940 年 3 月まで）
1940 年 3 月　大阪府立高津中学校教諭（1946 年 3 月まで）
1945 年 7 月　臨時招集により京都市伏見桃山歩兵第 9 連隊に入隊（同年 8 月復員）
1946 年 3 月　浪速高等学校教授
1949 年 6 月　大阪大学助教授
1956 年10月　大阪大学教授分校
1963 年 4 月　大阪大学教授教養部
1971 年10月　大阪教育大学教授
1972 年 3 月　大阪大学名誉教授

Memoir of Osaka University talked by Professor Emeritus Tadahisa Goto

Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Professor Emeritus Tadahisa Goto related to the history of the Naniwa Senior High School and its successor, the Division of General Education at Osaka University. Professor Goto, who was born in 1910, majored in linguistics at Tokyo Imperial University and graduated from it, worked at some junior high schools in Chiba Prefecture and Osaka Prefecture as a teacher of English in his youth. In 1946 he became a professor of English at the Naniwa Senior High School. In 1949 the school was merged into the newly established Osaka University, and Professor Goto became an associate professor of its Division of General Education. There he fostered many students, and made a great effort to make an annual calendar of the many subjects. Professor Goto studied not only English but Kiswahili, which he taught to some students at Osaka University of Foreign Studies, now Osaka University School of Foreign Studies. He became Professor Emeritus in 1972.